



  
 安政見聞録  
 下

71  
 3755  
 3





門 31  
號 3755  
卷 3

安政見聞録卷之下

の夜と指て良人の死骸を捨ふ條

とて人として信実を有とて後才藝を能に達以とも信の心あり  
老へ人ありて人の心計りの工に維もよく知りぬる工とあがり色  
勝もよきもの由実を竭して事人小報るてくさる人の勝もよ  
ぬとに致る。目来由の似せありて老あり近く己富貴あると死  
老も実あり。一時その積を失ふの落魄するに及びて親きも疎あり。  
死てて世をひる老も更に路人の名ひをます。世に於て一とまふ。  
然るに世の好むとて手まひ貧富窮達に拘りざるこそ信実あり。  
人といふも。父子兄弟の姑く措く。夫婦の元他人あり。されども親に  
婦とありて互に信実を以てあひて。今さういふに及むねどその中

早稲田 大學 図書館  
第 23.4.1 号  
藏 書



以実あり不実あり。銘く生ま得る所ふるといふと多うの道といひ  
 工と知らば。父母の教へまればより心惑ひあり。そゆはまをて奴僕  
 の下。必ひるす婦人あり。されど由まらる老母に溺して。その不遜  
 无徳と責む。月性月来つて年と果後つひに半のどくらりて。己の  
 先礼をさるる。使由まて波が。死性今まて改むべうと悟り。顔  
 りさるる。老中人以下あり。中人以上の使婦にむける。十  
 六七八の教ひあり。然れども使婦の愚不肖。他より咎むべきもの  
 あり。はさて箇やうの人ふ。於て信実あり。めい稀なり。因て淫行の傍り  
 と離る。別離の端とひく。元来終節せう守る。不遜るる。婦  
 の下まら。まて信の心あり。故に人の信不信を察せんといふ。平生の言  
 行とて知るべし。お北を所さる。負く善く。使婦あり。半のさる

婦人まて。やま。入。ま。ま。と。婦。と。憐。ま。ま。後。初。中。の。ひ。さ。ひ。せ。ま。ま。暇。ま。ま。く。ま。ま。一  
 ける。去。年。十。月。二。日。の。夜。大。火。に。あ。り。て。大。小。狭。き。二。人。徒。共。に。外。の。方。へ。ま  
 出。る。う。う。が。その。近。き。より。火。炎。つ。て。その。身。の。火。炎。覆。ひ。か。り。ける。あ。ど。  
 元。より。負。き。身。の。と。ま。ま。ま。ま。せ。めて。苦。損。と。入。ま。ま。ま。一。首。筋。ご。ま。持。出  
 ん。と。崩。ま。ま。一。筋。に。潜。り。て。ま。ま。入。ま。ま。ま。一。脊。負。首。筋。ご。ま。一。出。り。る。ま。ま。  
 ま。ま。火。の。か。ら。ひ。今。少。一。雜。具。と。持。出。ん。と。首。筋。ご。ま。妻。に。脊。負。ま。ま。  
 近。入。る。ま。ま。この。時。ま。ま。梁。の。物。に。支。え。ら。ま。ま。と。あ。り。ける。ま。ま。の。ま。ま。ま。ま。り。け。ん  
 男。の。上。に。擔。と。擔。は。ま。ま。嗟。と。い。て。倒。る。と。又。一。が。灸。所。と。あ。り。ま。ま。その。後  
 息。の。絶。ふ。け。る。妻。の。大。小。狭。き。息。へ。ま。ま。より。て。引。起。す。小。更。ふ。心。辨。あ。り。ま。ま。  
 ま。ま。大。火。あ。り。て。救。回。さ。る。ま。ま。活。ま。ま。と。その。甲。斐。ま。ま。一。右。左。ま。ま。る。ま。ま。大  
 の。近。づ。き。で。ま。ま。その。身。に。移。ら。ん。と。い。妻。の。ま。ま。ら。く。歎。息。一。然。る。ま。ま。て。由

安政見聞録

服部 痛













節婦  
 賊にあふて  
 還て多くの  
 黄金を  
 得た





らむ。この葛蓐の重げある。定めてよ。おの在人とおのひその疑ひを過  
 ん。この葛蓐とてつとつたなるべし。いづく純き流し入るといへる。ふかの葛  
 蓐より。おん身より。夫の死骸ありし。後小用きて。思ふ。ふ満。極む。と  
 へらち。おん身より。葛蓐の衣を捨て。持出らる。赤心の水。沫とる。  
 かう。この葛蓐。おの葛蓐。ふか。た。大金のある。あま。い。この葛蓐。た  
 分る。ま。この葛蓐。おの葛蓐。あま。い。ま。つ。此。よ。と。おの葛蓐。た  
 び。と。葛蓐。一。変。して。その葛蓐。と。その葛蓐。へ。おの葛蓐。た。か。つ。て。盗。人。の。か  
 葛蓐。を。負。ひ。ら。て。逃。去。り。て。ま。り。ほ。い。の。り。に。おの葛蓐。た。か。つ。て。盗。人。の。か  
 と。鎌倉。川。岸。の。丘。傍。に。その葛蓐。を。持。て。おの葛蓐。た。か。つ。て。盗。人。の。か  
 ら。この葛蓐。を。記。して。あり。け。ま。い。ま。と。り。て。所。の。老。母。を。尋。ね。来。り。て。か。の。妻。が。性  
 方。を。探。し。て。おの葛蓐。た。か。つ。て。盗。人。の。か。の。妻。が。性。方。を。探。し。て。おの葛蓐。た。か。つ。て。盗。人。の。か

て菩提院へ葬りて。懇懇に吊ひけり。かくて。被。盗。人。の。遺。金。の。金。を。おの葛蓐。た。か。つ。て。盗。人。の。か  
 女。が。赤。心。に。より。神。の。授。け。の。ひ。を。おの葛蓐。た。か。つ。て。盗。人。の。か  
 の。よ。く。佛。子。を。疑。い。と。あ。ん

こ。小。江。都。浅。草。橋。の。き。に。賣。り。て。著。以。纏。束。あり。おの葛蓐。た。か。つ。て。盗。人。の。か  
 高。人。の。廊。に。務。め。の。様。儀。ある。老。女。と。い。ふ。人。の。二。あ。き。り。の。れ。の。おの葛蓐。た。か。つ。て。盗。人。の。か  
 一。が。榮。枯。得。卷。の。常。の。な。り。ひ。その。う。ち。おの葛蓐。た。か。つ。て。盗。人。の。か  
 の。小。腹。を。と。り。せ。この。男。の。年。来。の。奉。公。の。空。一。く。た。り。脱。に。腹。に。おの葛蓐。た。か。つ。て。盗。人。の。か  
 け。ま。い。は。な。く。その。おの葛蓐。た。か。つ。て。盗。人。の。か  
 依。り。て。元。来。と。り。て。志。死。活。業。な。り。と。おの葛蓐。た。か。つ。て。盗。人。の。か  
 給。金。の。遺。り。な。く。こ。の。老。女。の。父。母。に。送。り。書。ひ。け。る。や。ど。あ。る。おの葛蓐。た。か。つ。て。盗。人。の。か

二二二



かく流浪の身となりて詮方なきにばる家不在り一日覺えたる菓子  
 と製して僅むろりと紙に書之知るの方不持きて價を昇く鬻りて  
 聊の種分と得てその月とて當にけるがその父母の老婢を人の多く  
 出入ると獲ひ日暮右小左のりどにこの男母の工とて心憂く思ひ  
 別小きやうある家と借り一人住んで菓子と製し賣ありきて父母に  
 へ不自由なきやう小心を著けその才と相計りて老父母を養ひける  
 然るにこの夜北風吹て逆き多し家清は老男女堅ま死ぬと  
 ばく小の心を使心由空小惑ひ出て父母が居所へゆく小の志すて大  
 小清も是と入るまきやうもる。徳を父母へ奉老て是より小弱け  
 まは定めて梁の下に埋りしけんと胸躍り泣悲とて崩れ家て  
 掃除け家紙え漸くおて手紙へ到るに葉のぶら根摧け棟をて根

下ノ五

へ地にあり。徳へと心由心あつて精力に任一本せと除け家の程で  
 のそきつを夢をあけてもままど。さういふ身由りま二人ありと  
 一由ええびかての速早くこの所と逃出一のるを。と妻時約港  
 ありける所へ火の廻りとして馬娘の挑灯を照し。二人来る老あり  
 かの男の妻よりてあの家に住し老主婦何方へうと退し。おん身等  
 知りておのする也。と向へ火の廻りの男答へて向にま地をといふ  
 りどに。老主婦のまら出とて長屋ある甲乙が。とて携えて結と由に  
 兩國橋の方へ逃さる。ままど大く怪我のあつて彼如を索ねるへと  
 の。彼男の妻よりあへば徳の助りうのみ。うと家と合せ夫おむるへ  
 的志して立戻り。ままより兩國橋のきにゆき。手紙う此知うとてづぬ  
 るに度小治と唱ふる所に。つがめてありけま。男の足るより確り進

三上三目録

月言





孝子父母  
を護り  
資財を  
忘る





づき喃父母よ。そのふと居のひこそ。娘一けと。涙を流し。飲ひ。知まる人の絆にゆき。戸一枚と。借りうけ。こを敷きて。父母を。載せ。まづ是にて。安堵せり。とかの伴ひ出る人を。索ね。愛く。恩を。謝し。る。不侍りを。去や。ら。半時。むら。在りけるが。積に。夜。うけて。肌を。た。に。心。著きて。老父母の。さ。ぞ。う。多く。在。ま。ら。んと。せ。ま。よ。う。再。び。父。母。が。住居。一。家。に。到り。幸。ぞ。て。漸く。横。一。つ。て。先。出。一。肩。ひ。け。て。出。ると。死。その。弟。に。出。會。て。如。世。の。よ。う。と。告。ぐ。その。弟。の。兄。より。も。その。住居。遠。け。ま。の。遅。く。あ。り。る。よ。う。と。階。梯。を。そ。緒。共。に。度。小。踏。る。父。母。の。絆。に。性。ま。づ。その。を。車。と。祝。一。ける。ぐ。この。弟。の。縁。て。より。家。別。ま。し。て。妻。子。あ。り。孫。に。その。所。由。比。展。つ。く。住居。の。ま。前。ま。は。は。ま。ま。を。車。なる。を。と。り。所。由。て。道。路。に。伸。ゆ。あ。り。と。父。母。の。こ。ろ。あ。の。嫁。と。孫。の。身。の。

上。と。ふ。案。下。の。你。の。願。ひ。き。て。稚。ま。の。の。身。の。を。針。ら。よ。音。の。い。こ。あ。あ。と。珠。に。兄。の。傳。副。あ。ま。い。の。さ。う。心。あ。と。な。り。と。兄。の。苦。に。勸。め。あ。ぞ。さ。い。と。そ。の。身。の。ま。は。見。の。終。疾。父。母。の。傍。り。と。懐。く。と。離。れ。と。な。程。の。その。疾。の。明。ま。ま。ま。に。一。握。の。飯。も。な。し。と。小。於。て。始。め。て。心。づ。き。僅。む。ら。の。残。あ。り。ぐ。こ。の。強。勁。に。心。志。ま。懐。納。め。も。や。ら。ば。泣。出。て。後。の。日。が。お。か。と。願。ひ。の。と。ま。あ。ら。ば。父。母。の。傍。り。と。離。れ。と。一。向。に。念。下。の。う。い。え。今。あ。り。へ。夜。の。お。小。居。り。て。か。の。殘。ま。り。て。妻。子。と。死。ま。ま。と。ま。し。げ。り。あ。ふ。今。あ。つ。え。ん。さ。い。の。他。に。な。ら。な。し。ま。づ。ま。ま。居。り。て。有。と。ま。と。お。え。と。の。う。と。父。母。告。ま。ま。居。り。て。ま。ま。お。と。る。れ。こ。の。ま。ま。火。災。も。あ。ら。ば。珠。に。養。の。後。案。と。つ。え。て。擔。端。の。ま。う。傾。ま。ま。の。こ。家。の。崩。れ。下。あ。あ。と。ま。れ。ば。ま。ま。入。り。て。ま。ま。を。え。る。ふ。育。に。出。り。時。の。ま。ま。あ。て。何。も。失。せ。



うるものより男の大小をばて。残の懐に僅ちり。残とる飯及び穀  
 きしる菓子までも。終に入して。若ひも。父母の由進め。自身も。食ひ  
 且父母の近隣ある甲乙。小の恵とよ。一時の飢を。凌ぎけり。これ果なる  
 所。親にあり。親あるもの志。維くゆか。あるべき。なまじと。天災不  
 の難あると。死まづ。手。後。来と。固る。ふ。より。金。銀。資。材。を。先。に。て。父。母。と  
 後。ふ。ま。る。もの。あり。ま。の。男。と。懸。隔。以

固ふの天正の頃。何素といへる。士人あり。重く。登。庸。り。ま。て。書。頭。を  
 務む。然るに。性。素。金。銀。を。好。き。且。と。修。る。を。心。に。け。り。折。り。そ。の  
 黄金と。出。し。書。院。に。並。て。多。寡。を。試。み。次。弟。小。鍾。と。と。樂。と。い。ふ。有。る  
 と。死。あ。の。士。人。例。の。下。り。修。る。黄金と。出。し。度。き。書。院。に。奔。満。て。入  
 後。面。小。笑。を。會。と。腰。り。る。き。樂。と。と。て。こ。ま。ま。を。賤。を。あ。り。け。る。と。り

から。人。素。つ。て。今。組。下。り。雅。く。飯。初。の。喧。嘩。より。脱。れ。及。傷。に。及。ぶ。ん  
 と。せ。頼。来。つ。て。送。め。り。と。急。と。告。る。もの。あり。け。り。そ。の。人。岐。て。お  
 残。き。黄金を。納。む。る。に。服。あ。け。且。と。そ。の。ま。り。で。き。あ。れ。が。そ。の  
 事。彼。書。院。と。あ。ひ。て。送。め。ら。る。そ。の。疾。を。明。し。翌。日。の。月。中。過。る。に  
 や。う。く。緯。の。果。一。く。と。ま。り。お。に。帰。り。が。幸。小。鍾。を。り。屯  
 ま。る。黄金。生。物。書。院。へ。出。せ。し。を。り。不。慮。に。送。ぎ。の。始。ま。り。て。以。上  
 一。區。疾。を。扱。中。お。に。帰。り。来。れ。ど。も。更。に。そ。の。黄金を。念。と。せ。ば。と  
 以。於。て。半。生。と。より。士。人。あ。て。金。銀。を。修。る。と。好。む。の。と。陋。と。と  
 残。る。もの。も。多。う。り。が。這。回。の。こ。ま。お。の。て。残。り。の。こ。ま。お。は。と。悔。と。  
 かく。て。こ。ま。士。人。の。志。氣。あ。り。と。人。こ。ま。と。感。び。と。い。へ。り。そ。の。事。ハ。其  
 あ。り。と。も。そ。の。親。ハ。本。文。に。り。菓子。賣。の。男。に。似。たり



○教者未幾と穢りの條

依に傳へての古へ未幾の吉凶を知り且天変地状を知る。こと  
 神人と稱あること所謂吾朝安部晴明敏の大徳などの類ひ  
 をりしを唐山明の時堪樂禄命とて人の吉凶悔吝を知る術あり  
 或は六部道人といふもの人の肌骨の象を看てその人の事を指し  
 こま中らざる所なり是等いふところある法術は世に傳りて秘に  
 まし但今の世に未幾を穢るる名僧と稱する人牛に二三中はあ  
 りむ易学へ未幾の工とて知る術ありといふことと學ぶ所精か  
 らむ俗情胸中に充るもの幸ふ是と云ふは言ふ所系師のまじの術あり四  
 方都といふ盲法師あり誰人あつてひけん人ふあてを夢を授け  
 垂れその人の吉凶を穢る但ち法師が天性を他に傳へる人あり

然るにこの人年々此術の精しくなりて人の為に益ありて己  
 らを憂はざるを悔ふよりあはれとて覺え得て人ふ逢ふにその人の吉凶禍  
 福胸にうかび右流左きと限りたり。忘まんといふ人ど忘まばこそ生  
 涯の苦勞なり。と歎息しつひひけるも。あふ文政十の庚寅秋七  
 月二日あて。今を去るに二十七年。その日申の時たるに。系師大に  
 北震なりて洛中の土瓦幾多比みど。崩はざる所あり。系師大に  
 決て抜下。怪我せし人も少く。びんを大に忍まをなり。家を乞り  
 出て大道ふ愛物を敷つた。飯の肴とて補糧て。こふ居るに二之日。  
 あるひ大寺の境内にうつり。その揺返して遊ふける。然るに二之日  
 まで。あふその名残をゆらび。ふさはるる。時あり。始め入る夜二  
 十度たり。後西の邊に留遠くなり。七八度より四五度にあふ。そま







揺も者一うび。さうけさど枕養考ふ由。ひささく人々懼きて大路に  
 臥さるの少ううび。固て日本橋へ何人々。さや大層の来る程あけは  
 安堵してあに入も然るうの夜も不犯さき痛に罹らんとひさ  
 精一。國字で附てききかにもえ安きやうに是で流せり余も性か  
 小是とててき人の至誠を感ん。さて文政の度系於の比養小。か四方於  
 との盲法師。朝おれて物の言をて大不訝りて僕と嘆び。今日の大に  
 調子ねひて。かやうす突ひのあらん日もう早く朝飯をききめて。滋誠  
 の方へ伴あひゆけとの僕も憐てさうが明察。覚得るさうなるは急ぎ  
 うに朝飯を遊め。その身も俱に合ひあまのて頼て多と推考え乃  
 と急ぎて。滋誠のきへまう一に四方於。由安堵せざ。ひささ此処に  
 て。調子くるる。さううびさるにさうい愛宕の傍何素ハ奉

来の初さうと。你も知る所さう。とて彼処へ伴えとの僕もをめて  
 密にあり。かの傍の絆久々に傍へ入て研ら。何るありて早矢小  
 来さ。さうやと問けさ。四方於。さうと。今日ハ調子。さう  
 比。さ。不系中。誠却せん。と。然。さ。ど。後。あ。死。を。入。小。の。人。へ。き。事。か。う  
 ね。ま。う。我。の。ま。お。と。出。て。滋。誠。の。方。小。至。ま。ど。も。松。調。子。の。沈。さ。る。由。あ  
 この新まを来り。と。天息。ゆて。ひ。け。さ。ば。傍。も。急。て。この替考。例。と  
 知。さ。ば。う。ち。残。き。ま。づ。是。下。が。心。あ。る。何。の。後。と。察。し。る。累。ま。ま。さ。き  
 とのひけるに。方。於。て。我。も。ま。さ。え。ま。ま。さ。ば。知。り。さ。う。十。七。八。八。火  
 哭。あ。う。ん。と。妻。時。あり。て。ま。さ。考。へ。ひ。ま。づ。此。処。も。由。調。子。さ。る。ひ。て。全。く。安  
 堵。ま。一。雅。一。今。さ。う。さ。き。所。へ。あ。り。さ。う。と。を。け。さ。ば。傍。へ。ゆ。て。身。さ。う  
 由。さ。き。と。の。復。摩。雲。なり。彼。処。へ。ゆ。て。見。よ。との。四方。於。悦。び。ま。さ。







のどくと白濁所ええけきと尋常の病妻と。必ひ似てありたるが。後  
 不吐けべ地養あり。あの電のええへるへ地中の火氣發してゐるや。是を  
 是るるとえへ世俗のの雷電と同理との事。煙へうらびと煙の思  
 ふに陽氣陰小迫めらるる。由。樹根りて發する。と云ふ養ひ動くと理の  
 事あり。と云へ人の瘡を病に表し陰氣満てると云ふ為に悪毒の裡に  
 熱を食て既に發せんとす。然れども表の陰氣に閉らして發する  
 を得て。と云ふ於て身體を養ふと。精志をくくして熱發すると云ふ  
 ひ止むと世界ふと云う。地養の理と固く死あり

按するに然と云ふ地養の象と作る。と和漢之才圖會に載り。  
 まづ二之汁を密に桶に無砂を交り水を投下底の傍に樋口  
 をつけ。投下る水を出し樋に流るの器のわし人息をその樋

口小吹入るに。教人相交ると十分小吹のとき急小その樋口を塞ぐ。則  
 氣息の陽陰小迫り。せんと欲して桶獨り養ひ動く。その陽盡は  
 と云ふ養止むなり。小兒紙ととまる所。以て。その理をうらむ  
 と云ふなり。この法。のまづ。然と云ふ。寺嶋良安が記す所。渠  
 の極めて試せしあり。

さて地養後十日十日を経て。晴夜四方に先りて發し。發へば遠き電の  
 如し。あるその頃人小語るに。ことをする者多し。因て。よふ地中の陽  
 氣脱に大小發せしと云ふ。まづ。盡く出竭させ。その名。養夜とも。  
 樹く小發する。孔を。大陽の先りにええ。夜の。こと。を。する。  
 する。岳に。電の。を。する。小。その。光を。何処と。定まらば。今。その。身。の。飛  
 は。土。地。より。由。火。氣。發。する。なる。べ。け。と。と。云。は。小。ある。人の。知。る。る。



の

○神明萬民を憐れむの條

その頃雅のころより専ら風流せし。その大儀にありて渾身傷損  
 由なく。況て今ても類する者。この神明の加護にまさる。因て千人の  
 被をえらる。白き毛長二三寸あるのあり。こは伊勢 皇太神宮の  
 髪より新所にて。その毛あるの災害を免るといひあへり。ゆふ由常  
 下苦用の衣敷の被より白毛をえ出ひのまゝあつて。ゆつてこの下  
 あつて。このひ継ぎ浴するまゝを世とてまて知らざるのなり。然まども  
 億兆の人民盡く然るにあつて。あまゆまて不測あり。元來我 邦を  
 神國なり。貴族上下の人々の。神明の擁護にありて。榮えざるものは  
 其のもの 皇太神宮より授けり。白馬の毛ありといふ。余が知已某ある

老人の深く信するてありて。このこと疑はせ。家内あつて近隣の男女の被  
 を探らするに多く。この毛出ふけり。長さ九七一寸五六分。白くして髪あり  
 とぞ。夫神明の口計らひん。毛をりて。後るべう。つて遙くする神代より。  
 中古近世に及ぶま。さむぐの奇きまてあり。粗正更に由。裁まて。さ  
 て疑ひ証べう。つて

按るに天保年中。伊勢山屋。長りといふ。と流行。決ふの人民老  
 少をのぞい。伊勢の 宗廟。不端。とて。幾千。多といふ。を。知。つて。道  
 路。を。焼。の。輩。へ。その。疲。勞。を。投。ん。と。て。或。ひ。馬。後。を。出。し。て。こ。と。と。ま  
 せ。簾。幕。を。出。し。て。怒。ふ。合。り。ま。草。鞋。を。脱。し。酒。飯。を。施。す。こ。の。故。に。一  
 族。の。盤。頭。を。召。び。し。て。怒。る。者。も。行。路。脚。の。難。あ。つ。て。救。百。里。の。道。  
 小。疔。と。稱。ひ。因。て。少。人。女。子。と。い。ふ。もの。欺。き。犯。さ。る。と。更。に。あ。一。実

天保長問金

及部歳



小神明の冥恵にあはれむるの正に及んば、但性古よりある  
 教度あり。天保六十年に一度行つるといふも、まことに不測多し。天  
 保度の山麓、来りの節、何方ともなく、太神宮の太麻空中より  
 降り来り。一測小墮る。下その中の一人、系宮を企て、心とも  
 ろく、あつたるとき、見を空へて、まともくと出るより、降小一郡に  
 及び一玉に及ぶ。或人、伊勢の山田に居り、が、かの太麻、幾箇とも  
 るく降て、町武の屋上に墮る。人々不測、小あり。伊勢の神友、小同  
 ふに、かの家々にあつて、失する太麻一箇あり。と云ふ、実に神愛  
 の不可思議を識るとも、あのとまに中國、畿内、ふ多く降つて、その  
 所より、誰ともなく、系宮を始り、東國、西玉、北陸、山陰、山陽の玉に  
 奉つて、系宮よりけりとも。遠く近き世のことあり、誰くもよく知

まら。箇指の奇瑞、大日本、二千七百餘坐の神社に、伊勢より外  
 あるとさし、故小遠回の天災、小也。この神の護り、より更に祈禱を  
 きふあり。或人、法で強論を立て、このこと、法でいふ。七世、神宮系民で  
 憐れむ。この天災を免らし、あつた、伊勢、若なる、さふ、或ひは、燔死  
 或ひは、壓死のその、負、少、まら、う、び、さ、ま、び、神明人、ふ、より、て、具、負、ある  
 の、小、似、たり。遠く、例の、奇、を、好む、族、が、ひ、出、る、虚、言、あ、ら、ん、か、く  
 の、こと、も、亦、如、何、あり、て、社、小、毛、の、あり、や、と、い、ふ、ん、遠、く、あ、ら、ん、に、天、保、十  
 申、緒、五、山、作、り、年、東、都、小、毛、を、兩、せ、と、あり、今、猶、七、の、毛、を  
 藏、する、人、あり、その、頃、世、名、の、風、説、に、或、人、歎、の、毛、を、晒、せ、小、大、風  
 来、り、て、こ、こ、を、撲、き、普、く、兩、せ、と、あり、ま、ど、柱、に、ひ、あ、ら、ん、と、全



左指の予ふあつば天北不正の氣ふよつて初のごときとあるなり。  
 既に唐土小の例あり唐の咸通八年七月下郡に沸湯を兩志  
 て考者て殺し宋の端平二年七月魚を兩せしとありえの至え  
 二十四年土を兩以て七色夜の深きと七八尺半高盡く没死  
 せりその竹肉を兩一穀を兩以舊史に性く見ゆる処何ぞ毛を由  
 兩さるんえり怪しむに星のふりその際る毛邂逅に人の殺ふ  
 入るなりと事ゆづげ小強論せり志和漢の古例を引きそのの  
 所強論めきてゆく人毛で伝服以然とと事とそまを去ぬ吳  
 保度毛を兩志し或人西域の書に致へま顯微鏡をりて毛を懸  
 祝し毛毛にあつるごとと知りその辨を二紙に上木し知己の人に  
 贈りしとあり余も一枚を約ししが今遺失して附近にみし周て暗

紀のまて挙ぐ折時候不順ありて夏月天小陰雲掩ひ教日て  
 經て日光を見せ固て不時の冷氣行つて稻穀登りて死に  
 至はるの時陰雲の中に雲を生じその貌毛の下りその長さ寸餘  
 より二之尺に及ぶりのあり然るに風のさふ吹と北之墜は時  
 草木の精液を吸ひそひそに於て稻梁以下菜蔬の類ひこま  
 懸せむ國土飢饉に及ぶなり西域の地小此とありてその貴とゴサメル  
 との遠回路一毛とよの則ちのゴサメルあり顯微鏡みてこととるに  
 脊に七八の思態ありたよハ解のどり口とわがき折由あり全くの  
 毛にあつば蓋全體の毛定まらば多ふ美に思て帯て班文の如き在  
 ほど微少にしてその形如くぐりてかまが遠回人の殺に在しと大  
 に異なり後の識者の考へを俟



○前土中より多く生ずる條

安政二乙卯四月初旬石炭一畝比より前を生ずるの數幾千並より  
 を知らば農民の替殺さるのど聚めて二十五万七千條と云ふ事  
 前減ト云ふ事を見れば畠に入つて麥を食ひ大豆小豆の蔓を喰  
 べ然らば翌五月ふ至り何方とも多く殺すの蝨来つてその前を  
 逐ふ故に大半二減むと云ふ但ちの蝨何と云ふ来ると云ふを知ら  
 ざる一土人の言も海中より忽然として出ると云ふ奇譚中  
 世に辨へ土人の言も去年甲寅國中に竹実を生ずると許多之卷  
 五石餘石を以て食用と云ふ事と云ふ事と云ふ前竹実の土中に埋ま  
 りが化して土に沈み前頭小竹実の殼を頂くものあり土中に出て動  
 く小徒ひその殼自より落ると云

按るに唐の弘道の初め梁及の念小大なる前あり長二尺餘在  
 りけるが猫の爲小噬と云ふ事于時殺百前忽然と来りかの猫を噬  
 殺以少選あつて其後前を聚む州人を遣りて大前を捕へり  
 殺して之を食ひて其後去ると云ふ事本文小異ある事とも前  
 にも録に

○蝦蟇巨蛇と闘ふ條

下総土の土人の話に同七月十六日下総相馬郡大田の里小一丈四尺の  
 巨蛇出るものと云ふ丈一尺八九寸の蝦蟇出てことと闘ふ互に雌雄を交  
 する事あり人々を驚奇たりとして傳へ来ると云ふ事幾百といふ事  
 らば然るにその夜陸に及びて捕聞ひて交せむバ殺る人供と果して  
 小澤り夜明て殺すことと聞ふかくて十八日におび子の刻ふありて巨蛇



死せり。蛇カマの行方ユキガタを知しることを  
 按おすに和漢ワカン之才サイ圖ト會カに。蛇ヘビを咬かむ事あり。文字モノ集ツ累リ小コの輪リン  
 へ蛇ヘビあり。天アメさ履フキのこと。能スベ蛇ヘビを食タふ事あり。老オシ此コありこと。小輪コリンの長ナガ大オホなる老オシれ

安政長月録卷之下終



安政三歲次丙辰初焠發行

服部氏藏梓



